

外国語としての中国語の習得過程における 「インプット処理指導」の介入

学位論文内容の要旨

本研究では、外国語としての中国語の習得過程における「インプット処理指導（processing instruction: PI）」の介入に関する考察を行った。日本人大学学部生の中国語習得に関して、(1)「“有点儿”と“一点儿”」の習得におけるPIの介入、(2)「否定副詞“不”と“没（有）”」（以下、“不”と“没”）の習得をめぐる認知的学習ストラテジー、(3)“不”と“没”の習得におけるPIの介入、及び(4)“不”と“没”におけるPIの介入の縦断的変容、という4点について理論的および実証的な見地から検討を加えた。

本論は8章から構成されている。第1章では、本研究の背景やその目的について述べるとともに、第二言語習得（SLA）に影響を与える要因に触れ、本研究と関連する項目に言及した。また、SLAの外的要因の一つであるインプットがいかに関与されるかという問題と内的要因の一つである言語習得のメカニズムの双方に着目して議論を展開していく必要性を述べた。さらに、SLA研究が大きく期待される部分、日本の中国語教育の問題点を取り上げた。第2章では、「インプット処理指導」に関する先行研究を概観した。具体的には、SLAにおける心理的プロセス、「記憶」および「注意」の役割、インプット及びアウトプットの重要性、Focus on Form (FonF) 研究とその一つである「インプット処理指導（PI）」を概観した。PIとは、学習者がインプットを処理する際に用いるストラテジー（processing strategy）を変化させることによって、言語習得の促進を狙う指導原理である。PIは、SLAの本質が言語形式とその意味との関連づけを成すプロセスであり、認知心理学の「注意」、記憶容量、処理などのプロセスがSLAに大きく寄与すると考える。この章では、PIが高い水準の意味的処理が起きるように、意図的に学習者に多くのインプットの処理をもたらす、内在化のプロセスを促進させるものであることを述べた。第3章では、研究方法に関して、まず本研究における研究遂行上の方法論を概観し、本研究の研究のデザイン、調査に用いるテストの内容を検討した。最後に、本研究の縦断的調査の方法論であるケース・スタディの手法を概観し、調査のデザイン、データ収集方法、分析単位などについて提示した。

第4章から第7章では、本研究で行われた4つの調査を取り上げた。第4章では、調査1として、初級段階での学習者の“有点儿”と“一点儿”の習得をめぐる「インプット処理ストラテジー」について、語順の代わりに語彙的意味を頼りに文の意味をとらえる傾向がある点で「語彙的意味の原則」と関わっていることを示した。調査1では、このインプット処理の仕方に対して、大学2年めの学習者33名を対象に、機械的ドリルで学習者のアウトプットを操作しようとする従来の文法指導（TI、

traditional instruction) と PI を比較し、後者の方が効果的であるという結果と考察を提示した。

第 5 章の調査 2 では、日本の大学で中国語を選択する二年めの学習者 282 名を対象に、“不”と“没”の習得に関連して、言語理解と言語運用の両面から報告を行った。特に、この調査の学習者の中間言語では、一部の非動作動詞の否定、能願動詞の否定および習慣的動作・行為を表す用法に「時制」の影響が見られた。言い換えると、これらの文脈において学習者の“不”と“没”の選択が「時制」によって行われやすい傾向が明らかになった。また、テストのタスクの種類や使われた語彙の質などが学習者の回答に一定の影響があることも確認された。

第 6 章の調査 3 では、調査 2 の研究を発展させ、“不”と“没”の言語形式と意味との関係、この言語項目の習得に関する「インプット処理ストラテジー」を取り上げた。さらに、調査 1 の実践的研究のデザインをもとに、調査 2 で観察された学習者の認知的学習ストラテジーに対し、教室指導ではどのような対策をとるべきかを見ていき、PI の介入に関する考察を行った。

第 7 章の調査 4 では、調査 2 及び調査 3 を補完するものとして、二名の学習者を 6 か月程度追跡調査し、“不”と“没”の習得状況に関する考察を行った。具体的には、それぞれの学習者に PI と TI のいずれかによって否定副詞に関する指導を行い、メタ言語能力の測定、運用能力の判断のためのテストやインタビューなどを実施した。分析の焦点は、二名の学習者の、時制の影響を受けやすいとされる習慣的動作・行為の用法、非動作動詞の性質への注目におかれた。ここでは、この二名の中間言語がどのようなプロセスをたどって再構築されていくか、その変容と各指導の介入とのインタラクションを記述した。

最後の第 8 章では、本研究全体のまとめと考察、そこから得られる教育的示唆について述べた。そして、今後の課題として、「インプット処理ストラテジー」と中国語の文法習得の関係についての更なる考察、PI と他の指導の併用の可能性に言及した。

本研究の成果と貢献は以下の点にまとめられる。第一に、PI を中国語習得に介入させる諸調査を通じて、SLA 理論の構築に貢献している。これまでの中国語習得研究は、多くが中国語語学の研究や中国語教育の実践報告に属し、文法指導の研究について言えば、教育学と心理学の研究成果にあまり注意してこなかったために、科学的な検証が不足していた。本研究は、PI をベースに、認知心理学における「注意」、「記憶」、「処理」などの概念を導入し、学ぶ面と教える面という二つの側面に関して、認知的な側面から教授上の問題を解決すること方法を提供している。

第二に、方法論に関して、本研究では、学習者の中国語の習得過程の中に現われるさまざまな様相に目を向け、準実験だけでなく、学習者へのインタビューや彼らの学習プロセスに関する微視的な記録なども行うことで、これまでほとんど行われてこなかった質的記述データの分析も提示した。

第三に、教育現場と緊密に連携する性格を持つ研究として、どのような指導が学習者の習得のプロセスに最も合致しているのか、さらに、こうした指導を与えた後には、どのような学習効果や学習者の中間言語の変容が期待されるのかを明らかにした。このように、本研究は、実際の教育現場での教育上学習上の問題点を扱うものであり、効果的な教室活動の展開や教材開発に関して示唆を与えることができると考えられる。

本研究は、中国語教育の分野において、「日本の中国語教育の特徴をよく考察した上で、他の言語教育の豊かな成果を取り入れつつ、コミュニケーション重視の中国語教育の確立を図る緊要な課題」（日本中国語学会 2002）を扱うものである。こうした意味で、中国語習得・教育の分野、そして第二言語習得・教育の分野に対して学術的教育的に貢献するものと言える。

学位論文審査の要旨

主 査 准教授 柳 町 智 治
副 査 教 授 長 井 裕 子
副 査 准教授 河 合 靖

学 位 論 文 題 名

外国語としての中国語の習得過程における 「インプット処理指導」の介入

本論は、中国語学習における「インプット処理指導 (processing instruction: PI)」の効果とその実用可能性に関する実証的研究である。PI とは、学習者がインプットを処理する際に用いるストラテジー (processing strategy) を変化させることによって、言語習得の促進を狙う指導原理を指す。学習者に言語形式とその意味との関連づけを行わせるため、PI では、高い水準の意味的处理が起きるように、意図的にデザインされた多量のインプットを学習者に与え、内在化のプロセスを促進させる。本論は、PI による指導法と伝統的な教授法を大学生中国語学習者に対して行い両者の効果と中間言語発達の様子を比較した4つの調査を中心に構成されている。

平成 20 年 1 月 30 日に公開で行われた口頭試問では、3名の審査員から本論に関していくつかのコメント、疑問点が提示された。それらは、「非動作動詞」という用語、「有点兒」と「一点兒」の習得における「母語の干渉」の可能性、一部の学習者の否定副詞の習得のプロセスで見られた「U字型」の習得過程、「学習者自身が作り上げた目標言語形式に関するルール」の具体例、PI と他の指導法の併用の可能性等であった。

また、複数の審査員によってなされた指摘もあった。まず、2名の学習者に対して PI と伝統的な指導をそれぞれ与え、両者の習得過程を縦断的に追った調査4に関して、調査開始時点で両者の習得レベルに差があった点と、両者の言語学習スタイルが異なっていた点から、両条件の習得過程の比較は困難なのではないかという指摘があった。この疑問に対しては、著者より以下のような回答があった。そもそも実験的な調査と異なり、この種の質的な調査では学習者（あるいはそのグループ）を比較可能なものとは見なしていない。むしろ調査4の目的は、学習者の中間言語と各教授法の相互作用を縦断的にかつ詳細に記述することにあった。「何が効果的か」ではなく、それぞれのインストラクションによって「何が起きるのか」を知識と運用の両レベルで検討することにあったという説明が提示された。

また、PI は伝統的な教授法 (traditional instruction, TI) でも行われている文法説明の部分を新たにデザインし直したもののようにも理解でき、本論では両教授法の違いが明確に示されていないという指摘があった。これに対して著者からは以下のような説明があった。PI では、明示的な文法説明を与えるほかに、学習者の認知的ストラテジーの説明や、特別にデザインされた「構造化されたインプット」活動も行う。一方で、TI では、そのような教授デザインなしに学習者にアウトプットを求めている。PI は学習者の文法知識の形成に介入しようとするアプローチである点で、従来の TI とは明らかに異なっているという説明があった。

本論の成果は以下の点にまとめられる。第一に、PI はスペイン語、英語等の西欧語諸語の成人学習者を対象とした先行研究ではその有用性が報告されているが、本研究は西欧語とは類型論的に異なる中国語でもそれが有効であることを示した点で、PI をめぐる教授理論の構築に大きく貢献したと言える。特に、従来の研究では扱われなかった質的で縦断的なデータの分析と考察は、まだ粗削りな部分があるとは言え、理論の精緻化に必要な資料を提供しており、その点で評価されるべきものである。

第二に、教授実践の点から言えば、伝統的に文法訳読法や機械的ドリル練習が多く用いられてきた中国語教育の現場に対し、実証的研究の成果に裏打ちされた教授法とその具体的な実践指針を提示した本研究の意義は大きい。効果的な教室活動の展開や教材開発にあたって、実践者研究者に参照され多くの示唆を与える研究であると考えられる。

よって著者は、北海道大学博士 (国際広報メディア) の学位を授与される資格があるものと認めるものである。

以上